

而坐をゆるくとする心得なり、又火相に依て、先炭をする事ある時は、懐石の間見合て炭をくすべてよし、功者の客程、火相に心を用て心いそぎする故、炭加へ候へば、客落付て心閑なるもの也、坐を延す事は、香には不限、主の心持次第也、後坐の配合、水指に茶碗計有べし、茶入は小粟渦棗の類、又土物茶入も小きがよし、茶漸々引出來したる心也、服常よりも薄くして、能振たてるよし、湯相も雷鳴の峠、いかにも強火相肝要也、壺客衆見物の時、こかして出す事、名物に限りする事也、名物は底に名又は判等有との故、こかして出す常の壺はこかして出す事惡し、

〔喫茶指掌編三〕貞置云、口切の節、古昔は爐縁までも木地となし、春は塗縁として有つるを、近代執違しよし、やと云、側に見休居合て、是は必御覺違にてや可有、田舎も京もなべて木地は春とし、俳諧の四季の部にも木地縁と云て、春の季になるといふよしなれば、必思召違にてや有んと云、貞翁いや左にあらず、口切の時分には水次は片口、建水は面桶に至迄木地とし、又窓竹なども青竹に相替る也、然ば爐縁も木地を用る筈なりと強て被申けれ共、兼て聞しに相違せし故に、いかにも疑しく存居し處に、丹羽五郎左衛門長重の直筆の書に、古田織部かたへ、十月四日口切に参りし道具付に、釜霞、爐縁木地、せい高の茶入、袋なしと有、其外諸方の茶に行し自分の留書有を軸物になして、玉峯の家臣大谷彦十郎より送りしを所持す、見すべしと被出しを我も寫し置し也、古代は皆口切は木地縁に致たる事也、然るに其後卑賤の小賢き者有て、春は埃立見ゆるなど云て、木地が善と風と云出せしを、俚人何の思慮もなく用たるを、終に斯は唱來ぞおかしけれ、

〔駒井日記〕文祿二年後九月十二日 一十七日八日比ニ御上り被成、○豊吉四十石などを伏見にて御口切有べきにて候、廿二日 一於伏見御口切、廿二日、一番家康、加賀宰相とひだ、二會津少將、うらく、施藥院、○中八そらくんそうほんそうあん、廿三日、一番常真、かなもり、はしば與

市郎、○中 一右御口切之御壺四十石之由